

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成19年度農作物病虫害発生予察情報について

平成19年度農作物病虫害発生予報第14号を發表したので送付します。

平成19年度農作物病虫害発生予報第14号

平成20年3月24日
徳島県

I. 果樹
果樹共通

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年並～やや早い

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年より少なめで推移した。
- (2) 2月に実施した果樹カメムシ類の調査(11地点×2ヶ所調査)では越冬成虫を認めなかった。昨年(11地点×2ヶ所調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.09頭/m²)、一昨年(10地点×2ヶ所の調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.15頭/m²)と比べて越冬密度が低かった。
- (3) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

II. 野菜
冬春キュウリ

べと病

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が100%、発病葉率が18.0%で、平年(55.5%, 19.0%)より発生圃場率が高かった。
- (2) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が100%、発病葉率が13.8%で、平年(46.5%, 10.3%)よりやや多めの発生であった。
- (2) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、発病果率が1.0%で、ほぼ平年(10.0%, 1.7%)並の発生であった。
- (2) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並～やや多い(前年並～やや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、寄生葉率が0.3%で、平年(1.0%, 0.02%)並～やや多めの発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬剤が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並～やや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、寄生葉率が0.3%で、ほぼ平年(11.0%, 2.1%)並の発

生であった。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が10.0%、寄生葉率が0.6%)。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1)予報の内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年より少ない)

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では発生圃場率が14.3%、発病度が0.2で、ほぼ平年(10.2%、0.5)並の発生であった。
- (2)3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。
- (2)葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (3)春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
- (4)薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5)罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているので、速やかに処分する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年より多い)

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では発生圃場率が100%、発生程度指数が6.1で、平年(54.2%、4.0)よりやや多めの発生であった。
- (2)3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が35.7%、発病果率が1.9%で、平年(3.1%, 0.1%)よりやや多めの発生であった。
- (2) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、発病葉率が0.4%、発病果率が2.6%で、平年(7.3%, 0.2%, 0.4%)よりやや多めの発生であった。
- (2) 3月21日発表の1ヶ月予報では、向こう1か月の気温は平年並または高い確率ともに40%と見込まれており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、寄生株率が2.6%で、平年(7.0%, 0.9%)よりやや多めの発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が71.4%、寄生葉率が2.2%で、平年(29.9%, 5.3%)より発生圃場率がやや高かった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

Ⅲ. その他

- 1) 水稻の育苗や甘藷の圃場準備等が始まり，農薬を使用する機会が多くなる時期です。農薬による危被害，事故等を防ぐためにも，使用時には周辺環境に配慮した上で取り扱うとともに，使用残農薬，廃液等は適切に処分して下さい。
- 2) 水田に薬剤を使用したときは，7日間以上止水して下さい。
- 3) 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し，周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

テレホンサービス 0883 (26) 1199

ホームページ <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病虫害の発生予報，発生状況，防除法等をお知らせしています。